

529

62



始



詩集
癡都を行く

篠崎初太郎著

1923

異端社

大正
13.8.5

寄贈

社



著 者



(てに寺山寒)

古き都を來て見れば

淺茅が原さぞあれにける

月の光はくまなくて

秋風のみぞ身にはしむ

— 今 様

父
母
に
捧
ぐ

自 序

ここに、さ、やかな詩集を上梓して、世におくるに當たつて私の心は尠からぬ高鳴りを覺える。

長短蒐め得たるもの五十四篇、詩形かならずしも、のはず、韻律さきに低調突如として急迫、また童謡のごとく誦すべきもの、自分として、最も嫌ふべき傾向に、好ましきそれの錯雜たる交響の、多様さを現はした。私は切にこの心境の超脱さるべき時を望んで止まない、たゞ然し、貧しくとも現在の自分としてはこの未熟なる詩集をもつて、天邊はるかなる藝術の道の、なつかしき一片の標石とした。

私が一部の知己にこの詩集の前ぶれをして、専念編輯にたずさわつてゐる折から現實はいたましくも帝都の震災を報導して、ゆくりなくも生まましき癡都の慘狀を示した。幻想の夢に彷徨する詩人の胸も、この現前の事實には破れざるを得ない。然し、私は思ふ。詩が人生に於て、靈魂の預言である以上、物質文化の癡

滅は果して、人生そのもの、癡滅であらうか？こゝろみに千年の癡都に立つて之を見よ！人間の求むるものは窮畢に於てなんであらう？しかし、私は不幸にして答ふべき何ものをも持たないものだ、たゞかくのごこく感じ、かくのごこく唄ひ常に問題の盡くるなき提出者であるここに甘んずる外はない。

西歐の詩聖は言ふ『詩人よ語るな書け』こゝろ、あゝ、さらば、かゝるわがリズムを失ひし言葉も畢竟は饒舌の炎であらう。

大正十二年秋九月

大阪にて

著者

内容

自序

第一部

観音の秋

癡都を行く……………二

法華寺……………

十一面観音……………一六

横笛の像……………三

三十三間堂	鳥邊野	祇園	智恩院	京極	一力	鴨川	五條坂	清水	面
.....
九〇	八六	八四	八三	八〇	七九	七六	七四	七二	六六

大寧郡	藥師寺	唐招提寺	西の京	中宮寺觀音	夢殿	壁畫禮讚	秋篠寺
佛	樂山
.....
四四	三三	五三	四八	四六	三三	二六	二五

博 多 人 形	大 長 寺	夜 の 竹 林 寺	VI 卓 上	V ふ あ ん た じ あ	IV 歡 樂	III 群 衆	II 酒
.....
二六	二四	二〇	一九	二七	二四	二三	二二

1 ほ ん て ん	道 頓 堀 夜 曲	千 日 前	宗 右 衛 門 町	芝 居 の 幻 覺	傀 儡 師	文 樂	平 等 院	扇 の 芝	壬 生 狂 言
.....
一一〇	一〇八	一〇六	一〇三	一〇〇	九八	九六	九四	九二	

第二部

南支遊行

四馬路の夕	………	一三三
支那扇子	………	一三六
西湖	………	一四〇
魚樂園の鯉	………	一四六
爪	………	一五〇
石	………	一五四
蘇州小曲	………	一五八
洛陽	………	一五八

寒山寺	………	一五九
默	………	一六〇
點	………	一六三
虎	………	一六四
落書	………	一七二
留園	………	一七四
西瓜の種を噛む女	………	一七六
驢馬	………	一八〇

寫眞版 著者 (寒山寺にて——平井氏撮影による)



の
秋



廢都を行く

わが踏み行くは
むかし朱雀の大路。

いかなるあで人のこゝを歩ゆみ、
いかなる牛車の絡繹たりしか？

おゝ、目路もはるけく、
ひろごる大地よ！
太初じがしながらの

冷き土の姿よ！

ふごも思ふ
わが進み行くは、
かの羅馬の
七つの丘、
はた、
バビロンの
廢墟のそれか？

おゝ、
はるばるこして

山河

ひろごり、

幻想の堂閣

蜃氣樓のごごく、

いさほのかにも

回想の

糸を織る。

繪の

ごごき、

大和三山。

まごかなる

姿を

のべ、

秋なれば

さ、やかなる

小川の

ほごり、

蟲の聲

雨のごごく

ふる。

こゝに、

離々たる

雑草の
ほごり、
ほのかにも
曼珠沙華
ひらき、
ありし日の
大極殿
のあこ、
わずかに
二本の、
柱を
こぼむ。

こゝに、
一字の
精舎あり。
癡憐の
み堂のかけ、
ふしぎにも
たゝすめる、
金光の彌陀。
いみじくも
瞿曇の、
教を

垂れ、
つきならす
鐘樓の
かね、
殷々……
こして、
千三百
の時を
かぞふ。

お、
豪華なりし、

奈良朝の
文化よ！

光榮ある、
われらが
父祖の、
世紀よ！

雄々しくも
優秀なる
おんみたちは、
碧浪の

蒼冥を
蹴つて
乗りいだし、
絢爛たる
文物の、
花を
さかせ、

うらやましくも
純清なる
おんみたちは、
歌垣の

小夜衣、
はけしき
情炎の、
懐ひを
やる。

お、
一切は消えたり、
一切の人は死せり。

廣漠たる原野、
われを

つ、み、
放心の
雲、
悠久の
空を、
ながる。

お、
偉大なるもの
癡滅よ！
汝の前には
王者なく、

汝の君臨は、
あらゆる
一切の、
國土に
およぶ。

お、
願くば、
われ
癡滅の
前にたちて、
金銅

盧舍那佛を、
鑄んこころを
ねがふ。

さらすば、

われ

癡滅の

前にたちて、

たからかに

哀哭のしらべを

かなでん。

お、
か、らんごき、
われ
ひこり
癡都を行く……

法華寺

十一面觀音

ゆるやかな
衣擦れのおもをたてながら、
さきに立つて
うら若い尼僧は
歩む。
寂寥たる庭は
箒の目が
行きこぼき、

幅ひろい芭蕉葉には
秋の日は
さめざめこ落ちてゐた。

御堂の扉は
重たけに
錆びついた蝶番てふがひにきしり、
拜をして一步す、めば
香の焚きしめた匂ひは、
疲れた神経を和なごやむ。
念珠をつまぐる
尼僧の手は、

恭うやうやしく蒔繪の文箱から
小さな鍵を取り出して、
黒ずんだ纒絡の中で
かすかに厨子の扉を開らく。

「もつこ、お近くへ……」と
招ぜられる聲に、
須彌壇のそばちかくよれば、
朦朧とした塗黒の中には
金光も古びた、こうごうしき
蓮華の光背をうけて、
十一面観音の立像は

この世ならぬ悲願のめぐみを垂れて立つ。

しなやかなる腕は
左に水瓶すいびんをもち、
片手にはかろく
天衣の裳すそをつまみ、
な、めすこし上體をくねらした
豊満なる解脱しおとの肉付は、
天壽國にひらくこいふ、
かの青蓮花しょうれんげの
いこも平らかなる
臺座の上を踏む。

かしこくも光明皇后の御姿をモデルに
うつしまいらす

この肉身の類ひなき相好は、

心虚しくおろがむ一切の

人間の悲しき心に通ひ、

あえかにも、貴き

はるかなる天平のたくみを思はせる。

いみじくも

ふくよかな隆起の波うつ

胸のあらはなるあたり、

圓光のごまきにも

いくすじの輪にめぐる

麗はしき首を仰げば、

半開のま、にさがる古金欄の帳

怪しき影をおこし、

その小暗きにひらく

朱唇の口は

莊嚴の色をうかべて、

あふる、ごまき慈眼は

超世の光りに輝く。

横笛の像

端然として、おこなひすませる
法體の姿、横笛よ！

情火も、燃ゆる千卷ちまきの文で
自らをきざめる横笛よ！

お、おんみこそは
過ぎし日の上謁じやくびこ、
西八條に春鶯囀を舞ひしひこ。

けに、おんみの命運は氷雨ひこめふる、
よにも淋しき定めではないか？

かの往生院のつれなさは、
うらみ、瀧口のわかれ。

こ、に來て思ひをつ、むも、しばし、
嵯峨のわたり、千鳥ヶ淵に投じたのか？

純情のひこ、横笛よ！
おこなひすませる僧形のひこ、横笛よ！

おんみの唇は永劫にひらかなないか？
おんみの胸の火は再び燃えないか？

お、

まごころまごころ蟲ばんだ法衣をまごひ、
端然としておこなひすませる
横笛の像を悲しむ。

秋篠寺

ある日行つた
秋篠寺。

いまにも倒れそうな
南大門には、
糸のやうに細い
秋の雨がふり、

色のさめた

香水盤の扉には、
謎のやうに
重たけな
門がおりて、

軒の朽ちた
うす暗い
講堂のなかには、
埃を浴びて
さまざまな佛たちが、
くすぶりながら
異様な眼を、

ひからしてゐた。

時をりこ、で村芝居が
はじまるこいふ外は、
白狐でも化けて出そうだ。

ある日行つた
秋篠寺、

それは
わびしい心にしるされた
灰色の繪のやうだ。

壁畫禮讚

—法隆寺金堂

魂にふりかゝる寶相華、
いま妙香につゝまれて、幻想のほむら
ほのほのこ、もえさかる……

涅槃はふみしだく花の不思議、
熱帶の月さざろめる手弱女の織手。

れいろうこして風は薫り、
樹林の鳥——さわやかに、

篋篋のごこく空に囀る。

見よ！温顔の彌陀。

七重の華曼をうけて、
こゝに結印の相貌を現す。

ほのかにも、
心耳にひびく——
ろう／＼たる聲音は
瑠璃光淨土の讚仰、
觀音勢至たゝなめて彌陀を禮す。

見よ！冥想の彌陀。

死を超克するもの、

たからなる慈光をはなち、

輪廻の雲、

解脱の天蓋に化す。

お、

剝落の壁面に――

いま

ほのほのこ、

幻想のほむら、もえさかり、
大千世界、

妙香の寶相華、

へんほんこして降りかゝる。

夢 殿

こゝに白光をあびて、しづかなる夢殿はたつ。

丹も剥けた

廻廊のほこり、

黙然として

た、すめば、

珍らかなる

八角圓堂、

斑鳩の

ゆめを、まごろむ。

柔軟なる

線の錯綜、

豊麗、心を魅する

聲なき造形の韻律。

こは、

陽炎もゆる

大静寂の野に、

一輪

咲きいでし、

フムラ
小櫻草の幻像。

かぎりなき

榮光の

思慕に生くる、

天華の衣も

かろき、

永貞童女の姿。

冷たき

石段を踏みて、

内陣の中を

のぞめば、

小暗きに立つ

救世観音、

端嚴として

永遠の『時』を沈思し、

寶冠を戴ける

玲瓏たる容姿は、

妙光、亂轉し、

生けるもの、如き顔は、

不思議なる

微笑をた、ふ。

そは、現世の
快樂を遠離して、
憂惱の群生を濟度する
大なる誓ひの
示現である。

うつろひ易き
時の流れを、
かしこくも超脱せる
驚異すべき
實在である。

いくばくの
星霜は
この堂宇の傍を過ぎり。
そこには
ごんなにか、いぢらしい
人間の姿が徘徊し、
さまざまな祚念を
くり返へしたここであらう？
そこには又、豊麗なる自然が
ごんなにか春の精氣を送り、
秋の階調を、いかに奏でたか？
いま靜隠たる眞晝日のなかに

聞くもの言へば、
遠き世の
傳統のつながり、
宿命の影におのゝく
命の囁きである。

お、この
堂こそは、
いみじくも先驅者の
悲哀をなめたる、
古き世の文化の建設者、
千金の皇子、

上宮太子が
三昧の定じょうに
入り給ひしところ。
『思想』の光り
いさ高きにある
天才の瞳の、
美はしき輝きを拜らいす。

わが心
高揚して
かの瑠璃光の空、
えならぬ

薰蒸の寶坐に
近づかんこゝを
願ふ。

あゝこゝは
わが魂に甦^{よみが}へる、
『悠久』の天樂ひびく
搖籃である。

堂の一角を蔽ひて
一本の柳枝、
色相の

秋にけむり、
千三百の神秘は
法悦かぎりなき
憧憬の花を咲く。

こゝに白光をあびて、しづかなる夢殿はたつ。

中宮寺観音

おつ母^かさんのやうな
なつかしい中宮寺には、

爪切草が小砂利の上を、
ほつ／＼咲いてゐた。

尼^にさんの見せてくれた御前^{ごぜん}さまは、
まぶしいやうに笑つていらつしやる。

『おまへの願ひここは何んだえ、
さあ、遠慮なくお言ひ……』

(桃色の戀か、山吹色のおあしか、
それとも虹色に輝く詩であらうか、)

わたしの考へのまだきまらないうちに、
何もかも御存^{ごぞん}じのあの方^{かた}は、蓮臺をお立ちになりそうだ。

それでも一向うごかれる様子はない、
かすかに右の指先を唇にあて、

『可愛いそうに、ずいぶん迷つてゐるね……』
ミ、こゝ耳もミで、おつしやつたやうだ。

はつミ思つて、かたはらを振返へるミ。

案内の尼さんは、つまらなそうに欠あぐびを押へてゐた。

はやくこ、を濟まして、天壽國曼陀羅を見せやうミ、
てれかくしのやうに言つてくれる。

でも、なんミいふ離れがたい優しいお顔だらう。

瓔珞えいらくに頭をうちつけて、未練らしく帳とばりの下つて行くのを見てゐるミ、

すこし浮かせた左足の膝の上に、ゆるやかな
衣紋の波をうたせながら、いつまでも軽く右足をのつけてゐられる。

あの方かたはきつミ、わたしの心を見ぬいていらつしやるのだ。

それにしても、あんなに考へこんでいらつしやるのはなんであらう？

西の京

唐招提寺

さびついた青銅の

聖水盤には、

なみく／＼水があふれ、

亂雲のやうなみずごけが

忘想のやうにもく／＼と、

かさなつてゐた。

むかし三千の僧がゐたといふ

この伽藍のしづけさは死のやうだ。

蓮池にのぞんだ西方の小丘にのほつて、

講堂を仰げば、

ゆえしらぬ古い建築の驚異——

鴟尾^{しび}は蒼天に飛びかゝり、

風鐸は永遠の黙思に垂れ、

戒律のさまにたちならぶ柱は

佛陀の指のごまくふくよかだ。

……いま、このうつろなる心の上を、

松籟が、
さつ／＼こすぎる。

樂師寺

龍膽の匂ふ

ひこすじみちで、

ゆきあふものは、

紅い帯をした女、

本包をか、へた

若い學僧、

こう／＼こしてひろがる

大和國原——

ゆく手の雜木林は朽葉色をして

ちら／＼こ見えがくれする塔、

金堂のぐるりでは

小兒のむれが三輪車を走らしてゐた。

庫裏に廻るこ。

碁をかこんでゐた
顎髻の白い案内人は、いきなり立つて来て、

大きな鍵で

ひみつひみつ、

門扉をひらきながら

齒のぬけた口で、

説明をしてくれる。

雄魂をきはめた

ブロンズの薬師三尊、

石膏にをさめた水煙の
夢見るごまぐ飛翔する天女、

豊膽なる金銅の

聖観音、

めずらしい

佛足石の上には、

わびしい秋の日がおちてゐた。

郡山

さ、やかな驛を下りて、
一筋のびた白路をゆく……

まごころまごころ、藁葺屋根のまじつた、
しんかんまじつた

小さい昔の城下町。

こゝには、

魂をまよもす躁音や喧囂はなく、
たゞ眞晝日のうちに

人家は廂を並べて、
うつまじりま事もなく
生活をいそなんである。

しみじみまじつた、その眺めよ！

一つの黒板塀には、

『某氏政談演説』

のビラが貼られ、

風にひらく動いてゐる。

ねむたそうな眼を

しよほくさして、
三毛猫が床机の上につかつてゐる、
店番の居ない
一軒の煙草屋。

その隣りには、
戸を閉ざした
きたならしいカフェー。
玉葱や甘藷の皮が、
無精らしく
横つちよの溝板の上へはみ出てるのを
一つ／＼拾つて歩く

氣取つた二羽の鶏。
ふご、その二階を見れば、
青い草の延び出た
屋根のてすりに、
いま起きたばかりらしい
白いハンカチを首に巻いた、
顔の黄色く、はれほつたい若い女が、
ほんやりこして
向ふの方を眺めてゐた。

可なり広い小學校の講堂からは、
ゆるやかなオルガンの響が

はちきれそうな
元氣のい、肉聲さまじつて、
しづかな往來の空氣を
顔はしてゆく……

四辻の角には、
青物屋と散髪屋が向ひあつてゐる。
だんだらの捻棒の立てられた
奥の方の歪んだ大鏡には、
子供がしきりに
顔藝を映してゐた。
客らしい太つた中年の男は、

亭主を相手に、
片隅の椅子によりかゝつて、
世間話に夢中になつてゐる。

けばくしい柄模様の飾られた呉服店。
荒物屋と兼業の郵便局。
活動の人気女優の寫眞を勿體らしく立てた銃砲店。
けらく笑ひこけてゐる仕出屋。

あてもなく只一筋の道を、
すん／＼進んでゆくこゝ、
町の行き止まりに出てしまふ。

そこには鈴を振り御詠歌を唱へてゆく
講中の人々が通つてゐた。

もう一面に廣い田圃が家のすぐ後に迫つてくる。

向ふの堤の上を

一直線に走つた鐵道のあたりには、

郡山城趾の石垣が

日に照らされて見える。

狭い溝をめぐらした

露地のやうな中をゆくミ、

両側の家々には

四角い軒燈が出て、

ここかで

ボツン／＼ミ三味線の音が、

かすかに流れてゐた。

うす暗い格子の影からは、

チラツミ青白い亡靈のやうに

痩せた小女こをんなの顔が、

さぐるやうに覗いてゐる。

さう／＼家のつきる所へ出た。

金魚を飼ふ池が簀を立て、

いくつも前方にならぶ。

それにのぞんだ

枯れた旋花ひまわりの蔓の延びてゐる、

おしだまつた家の中では、

四五人の遊女たちが

だらしなく立膝のまゝ、

肌ぬぎで鏡臺に向つてゐたり、

長々寢そべつて講談本に読み更けつてなごゐる。

物うく、柱にかゝつた時計は、

このとき午後二時をうつ……

秋なれば家をめぐつて

やさしき秋の草は生え、

濁つた溝のあたりには

心細い蟀蟋の聲がひびいてゐた。

寧樂

寧樂は

七朝の夢に薫る、

たくみ、ゆかしき

金屏である。

まごかなる嫩草山。

丹青の四所明神。

艶なる春日燈籠のほごり、

妻を戀ふ神鹿あゆみ。

貝殻いろの八重ざくら、
らんまんとして、猿澤の池に散らばふ。

三位の橋に

た、すみ、

雅なる

大宮人を偲べば、

うつし身の

『時』を告ぐるか

東大寺の鐘のおこ、

金屏の

夢をゆるがす。

大 佛

お、いなるかな
毘盧舍那佛。

あらゆる一切の比較を絶して、
ひこり端嚴の相を現はす。

こゝに流轉の、ひこは跪き、
永劫の涅槃をささる。

蓮辨のもこ、かそけきに立ち、
異國の老女つ、ましく雙眼鏡を上げ。

面めん

—奈良帝室博物館にて

—
ごころ、ごころ

色のさめ、

『時』の蝕じしほばんだ、

さまぐくな

—
一列めんの面。

—
遠城樂の面、

伎樂の面、

舞樂の面、

翁おきなの面、

般若の面。

そこには

始めに終りのない、

結晶した音の響かぬ

交響樂シンホニーが、

落魄した『表情』の

進行曲マーチを奏かなでる。

—
二

目……

虚空にひらいた、
不動の蠱惑——
凝然として
一點にそぐ、
不可抗の彈道……

つめたい

石胎女の鬱憂のやうに、

さ、やかな

『生命』の顎に

挑みかゝる、

貪婪な

赤い笑ひ、
白い笑ひ、
青ざめた
頻死の笑ひ。

三

その病的な、
痙攣に

おの、く

歪んだ口——

所在なき
生殖の、

空ろな快樂を
愚弄する、
昂然とした
肩——

四

この
荒誕なる
寡黙の滲透は、
儻えた
依的兒のなかを
蒸發し、
流竄の魔手は

しづかなる
殺戮を
くりかへす。

五

面は『魂』に叫びかける——
猛烈な勢ひで、感能に跳りかゝる——
ミこころ、ミこころ
色のさめ
『時』の蝕んだ、
さまざま
一列の面。

清 水

—以下數篇を西京に住む西川鷹次郎兄におくる

噴水をかこんだ

緋毛氈の床几、

簪をびらくさして

お誂へをはこぶ娘、

陶然として詩をおもふ、

君のさみしい顔、

清水の舞臺は花にうもれる、
いま一團の小學生が石段をおりてきた。

五
條
坂

しだれ柳に、

月は

あをみ、

陶器うる店、

灯あかり

あかるし。

銀扇かざす

舞妓の
すがた、

影繪のまじく……

ほのかに、

清水の舞臺を

動く。

鴨川

きみの

しらべは

青海波。

河原蓬に

さくはなは、

はかなきひこの

おもひぐさ。

千鳥しばなく

夕まぐれ、

擬寶珠のもこに

た、すめば、

三十六峯

うちかすむ、

光琳くすしの

裾模様。

一
力

——大石忌によせて

めんない
ちぎり、
お手が
なる、
燭さかししの
かけに、
由良之助。

お輕は、
二階で
のべ鏡、
忠臣藏の
假名手本。

京
極

京極の夜に
みしひこは、

色香ゆかしき
まちむすめ。

袖すりあひて
かくれゆく、

紅屋のみせの
京鹿の子。

智 恩 院

左甚五郎が置き忘れた
唐傘のある天井には
燕の巢がかゝり、

狩野探幽のかいた
ふすまには、

澁い古びの色がたゞよふ。

奇妙な音^{カミ}をたてる

鶯張りの縁には、
時雨が足早やにすぎた。いつた。

祇園

おもたけな

金紗の

だらり、

軒燈のかけに、

ゆめのごこく

消ゆ。

鼓つづみうつ

白魚の手は、
かすかにふるへ、

王蟲いろの
うすき唇、
なにをさ、やく……

鳥邊野

—あるひと妻におくる

あなたと、

二人して

鳥邊野をゆくとき……

おそろしき、

病ひにくづれた

こじきが居た。

なんこいふ、

數知れぬ

墓であつたらう、

ひこりの老婆は、

手に水桶をさけて、

無縁のほこけを、めぐつてゐた。

それは、あた、かい春だつた。

浮かれた蝶々も飛ぶ、

花見がへりの人もにぎはふ。

あなたは、さ、やいた、

『要するに生きるこゝろよ』と、
わたしは答へた『なんこいつても青春だ』と。

お、忘れては居ないだらう、
あの結び紙の、たくさんむすばれた
お俊傳兵衛の墓を。

それから、思ひださないか、
紫色に線香の燻ゆるなかで
手を合はしてゐた半玉のゐたこゝを。

あ、それなのに、いま戸の外では秋の雨がふり、

あなたを失なつた遺瀨ない青春は、
しこく／＼濡れてゐる。

わたしの心は、あの墓石で蔽はれた、
それは空なしい魂の風景を描く。
わびしい夜のゆめの中で

あなたと、

二人して

鳥邊野をゆくとき……

三十三間堂

—ある時の印象

南北へ

二間おきに

三十三本の柱。

通し矢の

あゝ汚ちて、

奇怪なる

柳の由来……

金泊は剥け

面相さびたり、

千手千眼

千一體の

観音——

われ、夏日

こゝに立てば、

陽はさんらん

傳説の、み堂を照らす。

か、らんこき、

まこくに

三十三間堂、かなし。

壬生狂言

いつまで
たつても
おなじ顔、
見れごも
見れごも
面の顔、
うす氣味わるい
無言劇。

カンデン……

カンデン……

カン、カン、カン……

雲雀が首を
すくめてる。

扇の芝

—宇治にて

いたましき

敗將

源三位、

おんみの眠りは

おだやかであるか？

一陣の風

へう、へうとして、

乏しき

草をわたり、

幻想の修羅、

らくばくたる秋にせめぐ。

平等院

— 宇治にて

幽暗に、ひらく
金碧の双翼。

寂然として

立つ、

御堂は

淋し。

月

蒼じろみ

鈴變のおこ、

れんえんたる

阿字の池に

さ、やく。

夢も、豪奢る

源語

宇治十帖の繪卷。

文
樂

— 御靈神社にて

手ぶり

足ぶり

人形の、

肩をすくめて

眉をふす、

越路の

語り、

太の

おこ、

三勝

半七、

くぜつ

泣き。

うごかぬ

顔の、

もの

申す。

傀儡師

— 文樂の追憶より

幼ないまきの文樂の記憶は、

あやしい黒装束をした

三人の傀儡師、

覆面のかけにひかる

六個の灼熱した瞳、

冷たい、つぶらな動かぬ顔をした

男女の人形を操る、

がつしりした敏速な
三十本の指、

あゝ、それからだ、

『運命』といふ永遠の傀儡師は、數かぎりもなく
いたるまゝに黒装束の姿を見せる。

君は、

華な街を散歩したり、

會心の讀書に耽ける時に、

突如として、この覆面のメフィストフェレスに
出食はすこゝにはないか？

芝居の幻覺

——道頓堀の印象

夕霧

したひ

花道の、

出場でに

つまづく

伊左衛門。

こがる、

さきは

吉田屋の、

灯こもす

九軒

小夜格子さよこし。

.....

白しろ、白しろ

かゝる

粉なゆきに、

紙子の
さわり
身にはしみ、

戀慕の
ほむら
もえさかる。

白、白
つもる
かみのゆき、

ふれごも
ふれごも
かみのゆき。

.....
幕背で、
チヨボが、泣いてゐる。

宗右衛門町

月は早や
渡り初めして
中橋や
六軒町の
小夜格子

—近松「心中重井筒」

つ、ましき廓の夜をこめて
新内の音もかすかに、
蘆邊踊の紅提灯
連珠のごまくつながる。

凄艶なる姿態

障子に影をおこし、
見わたせば
道頓堀川、
おほろにも
春の夜は更けたり。

重たけなる
こつほりの音、
箱屋ミ語りつ、
露地に入る。

『河内瓢箪山、辻占……』

濕つほき聲の女は
辻から辻を、
ゆるやかに
小娘と共に流しゆく。

千日前

むかし獄門の
曝場だつた、

千日前。

いま惱ましき
歡樂の灯の、
千日前。

うかれ男よ！
うかれ女よ！
燃えさかれ……躍りあがれ……唄うたへ……

この世はいづれ火宅の、
千日前。

道頓堀夜曲

1 ほんてん

下には、虹のやうな、

光り色々響の、アレンジメント……

おまへは、うつかりこして横笛^{フリュイト}を吹く

さみしい妓藝天女だ、

おまへの居るところは、ずいぶん高い。

おぎろな髪を、そばだてながら、

おまへは櫓の上で、しよんほりこ、
月にむかつて笛を吹く。

11 酒

—— 放奔な、

アルコールの陰火。

青い……赤い……レツテル、

パーツミ、ふりかゝる

一ダースの輪舞……

『三味線の藝術』

トルコ帽のしやれ者、

ヒョッコリ……ヒョッコリ……

色硝子が震へる——

——人形のやうに青ざめた、腫、腫、

象牙の時計は止つて

壊れたレコードのさわり。

FIN FIN FIN NNNN……こ鳴りだす、

おぎけた、センチメンタルの

勘定臺——

111 群 衆

繪看板を見てゐるこ

胸ぐらを、ごやされそうさ。

男や女にもまれてゐるこ

眉見を切られそうさ。

「父つちやん……巾着きんちやくをしめてゐるな……」

黄色い聲で

叱鳴る奴はごいつだ？

IV 歡樂

淺黄いろの
バックのおりる
晩景、
するくく
ボートが
滑べつて行く。
乗つてゐるのは
顔の知れない、
氣輕な『青春』だ。

笑ひ上戸の
樂隊が、
こそばゆい
音色で、
廣告燈のあたりを
夜光蟲のやうに
おごりまわる。
いつそ、
あの波のやうな頭の上を
こび越えて、
橋の欄干から

ミビ込んでやらうかミ
思ふ……

あ、

片つばしから

薇薔いろの握手が
してみたいな。

それにしても君たちの

しかめ面は、

いつたい、ミコへ

おいて来たのだ？

V ふあんたじあ

光の王国の

ひめぎみは、

螢のやうに

さびしく光る。

なぜそんなに

青白いの……ミ、

きいてやるミ、

たゞ笑つてゐた。

あるときだつた
ちつほけな珈琲店の片隅で、
罇のいつたコーヒ茶碗をた、いてるこ
ふみその響の中で彼女の聲をきいた。

光の王国の

ひめぎみは、

ほんまうに感激を失つてゐる。

しかし俺はいつたい何を言ふつもりだらう？

VI 卓 上

流星が、

むこうの物干臺を散つてゆくのを

じつと眺めてゐる心地、

むぎわらのしべを噛んでゐるこ、

生きてゐるここが、なんだか

へんてこに思はれてくる。

そろ／＼、ソフトでも

かぶる季節だ……

夜の竹林寺

——千日前の印象より

もうもうこ、けむる

線香をあび、

うす暗い

さびれた肩額の

『松園山、竹林寺』に入る。

この

忘られたやうな

盛り場のかげには、

『みぎしの女、十九才』
『三十、午年の男』

こ、しるされた札の

まだ、なまめかしく貼られた
吉ほけた柱が立つてゐる。

何代目か、

『市川團十郎』こほりつけた
卯塔のそばには、
動かない乞食が、つくねんこ

うすくまりながら
鼻をすゝつてゐる。

白蠟のもえる

み明^{あか}しの前には

額^{ぬか}すく人も疎^{まよ}で、

鈴についた布片^{ぬのきれ}の綱が、

うす汚く垂れてゐる。

境内の低い壁のそこには、

不思議なる海嘯のやうに

歡樂の夜の渦がながれ、

無意味な千のごよめきの中からは

すぐ近くの常設館ではじまる、

こそばゆい安來節^{トシモロ}の顫音^{トシモロ}が傳はる。

拜壇をかこむ敷石の上には、

素足のまゝで、襟の白い年増藝者が、

ぐる／＼と秋に散る木の葉のやうに

はかない、お百度を踏んでゐた。

大長寺

—小春治兵衛を弔ふ—

冬も

ゆく日の

大長寺。

けむりの

みやこ

こ、

すぎて、

きみが

なみだの、

あごを

みる。

さむ、さむ

さむき

こけ石の、

はかは

井桁いげたの

紋いづころ。

しづみの
小川、
ゆく
みづは、
文化の
ちまた
十字街。
小春が
くまん
すべを

なみ、

われまた
見るか
因果經。

雲もまじる
冬の日の、

なむ
網島の
大長寺。

博多人形

——旬日の旅を了り、支那より歸へりし日

繪踏の女

ほの白く、

頸うなじを垂れて

博多なる、

こある店屋に

たつてゐる。

朱あかい友禪

縹子の帯、

三日月眉の

富士額ふじのくち、

黄楊つげの小櫛くしに

横兵庫、

ほんのり潤む

眸めのいろは、

なにを夢見る

空をみる、

紫摩黄金の

波羅葦はらいソウ増雲。

部 二 第

南 支 遊 行

花車な

細手を

むね近く、

合掌祚念

おん母の、

サンタ、マリアを

おろがめる……

春、三月も

おほろ夜の、

衢の灯も、なつかしい

人形店のガラス窓。

四馬路の夕

—上海にて

行くての路を壓して、
顫へるやうな
觸手がのびる。

赤光の柱は歪んだやうに、
幾千こもしれない
金の招牌の目を
ぎろつかす。
人間は海底を泳ぐ

電氣鰻だ、
混迷した陶酔が
洪水のやうに、
樂欲の魂にふりかゝる。

一つの招牌には
『青蓮閣茶樓』こしるされ、
瑯玕の顔をした女は
邪淫の猫のやうに、
しきりに媚びを賣つてゐる。
觀工場のやうにうちつゞく
商賈の二階には、

幽怪な燈籠トシロウがつられ、
ミころせまき榻の上は
は老酒の匂ひや、
阿片のけむりに、こりまかれて
幻想の焔のやうな、
嬌態のかすくゝが行はれる。

こゝには、みんな貴公子があつまり、
又、みんな歌妓がうたふのであらうか、
あらゆる思念を考慮をゆるさないほご、
すべては混亂を陶酔を幻覺に蔽はれてゐた。

往來に延び出た低い欄干によれば、
綠玉の夜天を焦がす灯は、
燃えさかる珊瑚礁のやうに
奇怪にも、おのゝきふるへる。

ここかで清樂の音が、すゝり泣くやうにひびいてゐた。

支那扇子

— 抗州にて

われ、

うるはしき

一つの扇子をもこむ。

そは、滑めらかなる柔肌じよはだの象牙の柄に

太白のごごく螺鈿ちりばめ、

楊貴妃の藤たけし繪姿を描ける

綠晶かなめいしの要石かなめいしあるそれにあらず。

または勇勁なる石摺の隸書の詩文を、

黒檀の骨にてた、みし、

素朴なるすがたのそれにもあらず。

あるは、やんごみなき人の袖に薰る、

麝香の匂ひをたきしめ、ゆらめく翡翠の飾りをつけし、

きらびやかなる孔雀の羽毛のそれにもあらず。

そは幻想の練絹ねりぎぬにて、

あえかなる魂の織りなす

世にも奇しき夢を生む、

形ならぬよそほひの

ふしぎなる

一つの扇子なり。

われ、このやみがだき念願をもて

浙省のほごり、

こある

扇莊のまへに

たゝすみ、

あてなくも

あれこれこ、

うるはしき

一つの扇子をもこむ。

西湖

——杭州花子路聚英旅社にて

前の往還で、
やかましく罵りあつてゐた
若力クリも
の聲もいつの間にかしづまつて、
しのびやかな
猫目石のやうな夜空には、
榆柳の梢が
さやく／＼と微風に
動いてゐる。

土産物を並べたてた
すぐ向ふの店には、
大きな招牌に
『紹興酒』と浮きでてゐるのが、
旅館の表のアーケ燈に
ほんやり照らされてゐる。
見ることもなく
うつかりこして眺めながら、そのうへ
心持のいい程な旅の疲れを
覚えてゐるこ……

こゝの給仕は、

紅茶の盆を運んで、

よく磨かれた正面の

桃花心木の卓にのせ、

愛想のいい微笑をうかべながら

廊下に立つて、

『月亮！』

こ叫びながら

外を指さす。

その方角には

一面の燦銀のやうに、
もうろうとした

湖心がひらけ、

燐のやうな月の光は

融けこむやうに、

海のごまくしづかに

ながれてゐた。

……燈の下には

支那陶器が、

つや、かな光澤を放ちながら、

親しみふかくなればられた。

温かい茶を注げる匂ひが
ほのかにみなぎる……

わたしは窓の方に
歩いて行くのも臆怯だ。
まるで見果てない
ゆめのつゞきでも
見つづけてゐるやうに、
迫りくる
しまの中に、
じつと身をひたしてゐる。

二三室へだてた
前房からは、
こぎれ、こぎれに
胡弓を弾く女の聲が、
あたりに物悲しい餘韻を
つたへてゐる。

まだ八點鐘をうつたばかりなのに、
この湖畔の夜は、
こんなにも、ふかぐぐと
更けてゆくのか？

魚樂園の鯉

— 清澗寺にて

魚樂園に

五色の鯉をみる。

いこも輕ろらかに

列をつくり、

金鱗に

銀鱗に

はるの太陽をうけて、

從横に

泳ぐ。

その園池の

真中に、

古びたる

寶塔は立ち、

默然として

魚群を

まもる。

魚群は

泳ぐ

潑漉として、

ごきに……

艶なる

五色の列はみだれ、

カみなぎる

一尾、

水上に躍る。

心

躍る

魚は沈み、

うらぶれて立つ
古き寶塔
かこみ、

五色の鯉、
おこなく
さんらんこ、
春の園池を
めぐる。

爪

— 支那小女にあたふ

うす紅いろの
かほそき、

乙女の

爪は、

瑛瑛のやうに
しなやかに、
すんなりミ
のび、

きよらかな
海の藻に
ゆめを見る、
白魚のやうに
かゞやく。

薫り

ゆかしき、

薄絹の

乙女は、

朝ごし

陽ひに
向つて、
紅銅を
さす。

その
かほそき
爪は、
ほんのり
紅らむで、
遠ほい
木蓮の

香を
なつかしむ。

石 佛

— 抗州にて

岩窟の幽暗に、
安座する石佛の
奇しき相貌——

龜裂の人つた天然石の上には
膿汁のやうな水がしたゝり、
いく百本の赤く塗つた蠟燭の先には、
迷へる魂のやうな灯が
うす黄ろくまたたく。

この偶像を跪拜する人々の顔は、
死のやうに青ざめて、
大声で早口に
なにかを祚りつゞける。

それは恐ろしい、
一念こめた必死の祚り——

地の底へ頭をつき入れるやうに、
なやましい心臓を噛み切るやうに、
聲音もがれ／＼に何かを祚る。

八十近い盲目の老婆をつれた、
人後に祚る

ひよりの少女は、
けなけにも大地に
頭をすりつけて、
この奇しき相貌の
石佛をおろがみ、
手をのべて老婆の
空虚なるまなこをなでる。

その熱をもつた

象牙色の耳には、
首をかゝめておろがむたびに、
かくしやくこして
小さい金色の
耳輪がゆれる。

蘇州小曲

洛陽

古城をめぐりて
運河ながれ、
搖盪たる柳枝のかけ
畫舫うかぶ。

洛陽の春はわが放埒の胸にひらく、
かぎりなき魂の、のすたるじあ。

寒山寺

驢背にしていたる
寒山寺、
文徵明の碑文のあたり
荒廢の趾をながめば、
うらぶれて春の日はてる。

默禮

廣漠たる地平に
落日は傾むき、
炎のやうな光輝をあびて
疎林や塔が
黒く浮きだす。

こほくこ
一輪車を押してゆく農夫は
長い巨人のやうに、

影をひきながら
赤光の中に
吸ひ込まれて行つた。

向ふの道を歩いてゆく
女の頭にはひらくこ、
白い布が金紙のやうにかゞやき、
あたりは丘陵のやうな
敷かぎりもない墳墓である。

濁つた小川にまたがる
穹窿形の橋の下では、

四五人の子供が、しきりに
何かをひろつてゐる。

ひしきり、

悲しさうな豚の聲が

こぎれこぎれに、

響いてきた。

いま

大平原の祭壇には、

莊嚴なる

永遠の黙禮がはじまる。

點 景

——蘇州の印象より

暗い過街樓の、こある窓のした、

脚の折れた小卓をかこんで、

うろたへてこびまわる蠅を見ながら、

老人と小童は、

無心で

鶏肉チキンをつ、いてゐる。

うろたへてこびまわる一匹の蠅は、

ぐる／＼こいつまでも狭い天井を舞つてゐた。

虎 邱

荒廢した山門を通つて
まがりくねつた坂道にかゝるこゝ、
乞食のやうな辮髪の男が、
いきなり、臂を捕へて
小さい書きものを賣りつける。
その表には巧な手で、
『虎丘山十八古蹟』とあつた。
石段を上りつめた右手の

さ、やかなる春草の小丘には、
さびしくも
秦の歌妓置嬢の塚がある。

そこを距てた前方には、
碧潭をたへた
断崖があつて、
顔真郷の筆だといふ
勇勁な、

『虚邱劍池』の
さざまれた石文が立つ。

吳の孫權が
こゝに寶器を求めて、
千人を斬殺したといふ
血なまぐさい池の面には、
足の長い水蜘蛛が、
遠い傳説の時代を
こつくに忘れたやうに、
かるがるこ
滑つてゐた。

劍池の上に架した
雙井橋には、

圓い二つの
穴が明いて、
こゝから
古いにしへの宮女たちは、
綾羅の衣をか、け、
やさしくも白き
織手をのべて、
化粧の水を
汲んだといふ。

左方に聳立つ、
長髮賊の兵火に痛んだ

古塔のおもてには、

崩れた窓をつたつて

おぎろな蔓草が蔽ふてゐる。

磊々として轉る

瓦や礎石を踏んで、

丈ながい

雑草の間を分け、

荒廢の跡を歩めば、

妖精のごとき『歴史』の頁は、

野馬のごとき

回想の領域を過ぎる。

寂びれた

禪堂に入れば、

ひろびろとした

床のうへを、

しめつほい空気は

じめん、こ流れる。

こ、に来て、

ゆくりなくも

わが梵鐘をみる。

かすかなる

陽光のうちに、

その銘を讀めば

『紀伊國

名草郡

安原庄

相坂村

補陀洛山

應供寺』

そのこまかき

文字のあこのゆかしく、

悄然として堂宇にさがる

鐘の姿、

測々として

郷愁をさそふ。

落書に……

——蘇州城内にて

ごちやく／＼入りくんだ裏町の
ぎつかの寺院の
壁だつたか？

ちんちくりんの
臺灣坊主のやうな顔に、
エレキの針金のやうな辮髪が、
逆立ちをしてゐた。

その傍には墨痕淋漓そのまゝの字が、
もつたいらしく

『莫作惡業』と記されてゐる。

車が

がらく／＼と、その磔石を鳴らして行くに、
よく似た顔が壁からこんで出たやうに
點心を、うつちやらかして追つて來た。

ところで、わたしもそろ／＼危なかしい
だれが『人生』を落書でないに
言ひきれやう？

留園

— 蘇州にて

奥まつた
歩廊の隅の、
石の光る
庭の
一角に、
緑服の老人が
ふたり、
水煙草を
燻ゆらしてゐた。

一面に、
芝が青い。

その二人の頭の上の
半圓形の眞鍮の棒には、
うつこりこ
一羽の鸚哥が
止つてゐる。

この枯淡な風景の記憶は、
微動だもしない。

西瓜の種を嚙む女

——滬寧鐵道の車中にて

たいくつな空間に
思ひがけなく

一つ、

にじみ出るやうに

白く光る、

支那陶器の

皿——

卓子も黒い

服装も黒い
頭髪はなほさら黒い。

そして

それらの物象は、

不思議な

神秘教の黒衣僧である。

この

凝結した

三次元のなかで、

たゞ

一點
白く
ひかる、
なめらかな
皿の中には、
流星のやうに
褐色の
西瓜の種が、
勢よく
一つ、一つ
跳り出す。

しづかに
坐してゐる
纏足の女は、
いまにも
腰をあけて、
この
象徴を
破りそうだ。

驢馬に

お前が乗せるにふさわしいのは
瘦せさらばへし遍歴の騎士、
かのドン・キホーテが従者
空想の島の太守、
あはれにもやさしき
サンチヨ・パンザ……

いろ褪せたひみすじの房は
素直ほなるお前の額にさがり、

しなやかな四本の足は
小刻みなダクを踏み、
首をめぐる愛らしき鈴は
十二の音をかすかに打つ。

そこに見ゆるものは老酒のこころ
駘蕩たる山河の眺めである。
そこに感ずるものは悩み多き
ひみの心ではない。

たんたんとして開けゆく平沙の道は、
なんごいふ明るい微笑みであらう。